# ヘアドネーションと多様性

岡山市・岡山後楽館高２年　石黒　睦乃

「ヘアドネーション」という活動を知っているだろうか。小児がんの治療の副作用などで頭髪に悩む子供たちのために、無償で医療用ウィッグを贈る活動の事だ。私は中学生の時、ＳＮＳでこの活動を知った。その時、この様なボランティアの方法もあるのだと衝撃を受けると共に、感銘を受けた。そこで、私もヘアドネーションを行う事を決意し、髪を伸ばした。そして、髪の長さが三十一センチを超えた時、ヘアドネーションを行った。

「もし自分に髪がなかったら」と想像してほしい。私は、小学生の時、沢山の若白髪があった。それがコンプレックスとなり、髪を束ねると白髪が見えていないか気になり、外出すると、人の視線が髪を見ているように感じられ、積極的になれなかった。髪がある私でも、その様な日常を送っていた。という事は、髪がない子供たちは私以上に窮屈な日々を過ごしているのではないかと想像した。髪を伸ばし、その髪を寄付するだけで誰かの世界を広げる事ができる。幸せにする事ができる。その姿を想像するだけで自分も幸せになれる。そんな、ヘアドネーションという活動を、一人でも多くの人に知ってほしいと思った。その為に私は身近な人に発信し続けた。その結果、昨年姉がヘアドネーションを行った。そして今、母が髪を伸ばしている。友人にも賛同してくれる人が増えた。父に声をかけたら笑っていた。私のあげる声は小さなものかもしれない。しかし、一人でも多くの人に届く声を信じ、声を出し続けようと思う。

もう一つ、この新聞記事には男子メンバーも髪を伸ばしていると書かれていた。私が活動を知ったＳＮＳの内容も、男の子の話だった。現在の日本では、性の多様性が叫ばれてきている。学校の制服も固定概念を無くし、多様性が広がってきている。しかし、社会全体の考えはまだ、「男らしさ」「女らしさ」を強く求めていると感じる事が多い。男の子が髪を伸ばすという事は、周囲から向けられる視線は厳しいものがあるのではないかと想像する。ヘアドネーションという活動が広まり、男の子が髪を伸ばす事も当たり前と受けとめられる社会になってほしいと願う。「男らしさ」「女らしさ」ではなく、「その人らしさ」を尊重できる社会になってほしいと思う。そんな事を思いながら、私は今、懸命に髪を伸ばしている。そしていつか、父と共にヘアドネーションをできる日を夢見ている。

2021年７月13日付　読売新聞

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。